2010 年度 修了

看護師の実践を支える経験
― 経験を積んだ看護師の語りを通して ―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
籔内　佳子

医療技術の進化に伴い、看護師への期待も高まる中、毎年全体の 10%前後の看護師が離職している。このような状況において、長年看護師として働いてきた者が、自らの実践経験をどのように受け止めて意味づけているのか、さらにはその経験が、看護実践を継続していることとどのように関わっているのかを探求したものはほとんど見られない。それゆえ本研究は、看護師としての経験と看護観がいかに語りだされ、組み替えられてきたのかを記述し、その記述を当事者の視点に立って解釈し、何が彼らの長年の看護実践を支えているのかについて考察することを目的とした。

本研究の参加者は、看護師経験 20 年以上の看護師 3 名であった。看護師たちの経験は、半構造化インタビューによって聴き取り、これらを逐語記録に起こして、看護経験がいかに意味づけられ実践を支えているのかを、一人ひとりの文脈に即して記述した。

看護師の語りをもとに、彼らの経験の成り立ちと看護観、看護実践の関わりに注目して考察を行った。看護師たちの語りの中では、長年看護師を続けることが出来ている要因が明確に語られていたわけではなく、どのように看護実践を継続してきたのかが語られていた。そして彼らは、一人ひとりの経験の文脈の中で自らの実践を意味づけていた。

また看護師たちは、患者とのその都度の経験に引き寄せられていた。ある看護師は、苦悩する患者と関わる中で、なんとかしてあげたいという気持ちになり、自分が出来ることを探しながら実践することを通して、看護の仕事に、誰かの役に立つことができる、喜んでもらえる魅力を感じていた。また看護師たちは、過去の看護実践での体験を後に振り返り、その振り返りを通して体験を経験として積み上げ、積み上げた経験が自信となり今の看護実践を支えていた。このように、ある体験は過去の時点に凝固することなく、その捉え直しを通して現在や未来に開かれた経験へと転化しており、その体験の経験化は彼らの実践の支えとなっていた。また、患者と関わるその都度の出来事とその意味づけによって、次の実践が志向されたり、次の実践に過去の実践が支えられたりしていた。

上述してきたように、何かの要因が揃えば看護師の仕事を続けることができるというのはなく、その都度の患者との関わりが、看護師を看護の世界に引き寄せ、患者との経験を通してそれぞれの看護観は培われていた。そして、患者との関わりの中で経験した出来事や、そこで培われてきた看護観をチームで分かち合うことで、彼らの次の看護実践、とりわけ、患者へのより良い看護の提供に繋がっていた。このように看護師の経験は彼らの実践に組み込まれつつ成り立っていた。そしてその経験の成り立ちの中には、いつも患者が存在しており、その患者の存在が看護師の実践を支えていた。